

18  
未 満

上田ながの

原作/R.Y.O.  
挿絵/緑木 邑

極煌戦姫

Maximum Burst

# ミスドレギア

捧げられた変身ヒロイン

試し読み版



## 登場人物紹介

Characters



あまのぎ あきら

### 天乃木 晶

しっかり者で面倒見の良い性格。年齢の割に落ち着きがあり、一見クールだがそれだけに一旦キレると凄みがある少女。胸に埋め込まれたセイクリッドジュエルの力でミストルティアに変身する能力を得る。

あまのぎ かえで

## 天乃木 楓

ふわっとした髪に愛くるしい面立ちの晶の妹。ナチュラルに甘え上手で晶もついついお願いを聞かされてしまうが、それも姉のことが大好きな故である。晶とともに謎の組織に攫われてしまう。



プロフェッサーネオ

リールスパイダー



アンギラント

ガイルオーク



序章	変身	007
一章	破瓜	030
二章	戦いの日常	073
三章	拘束陵辱	093
四章	ミューゼリオン	147
五章	淫獄	208
終章	家路	242

身体中から力が抜けていくのを感じつつ、勝利の笑みをミストルティアは浮かべた。

だが――

「残念だったなあミストルティアあ！」

怪人は笑った。

「なっ!? う、嘘っ！」

手応えはあった。拳は怪人の腹に深々と突き刺さっている。

それなのにどうして笑えるのか？ ダメージは？

「嘘じゃないさ！ ざあ、今度はオデの番だあああああっ!!」

笑いながら怪人は拳を握り締めると、お返しとばかりにミストルティアの下腹部を思い切り殴りつけてきた。

ドゴオオオオッ！

「うっご！ おぼおおおっ！」

力を使い果たしてしまったせいで反応することができず、直撃を受けてしまう。下腹部に巨大な穴が開けられてしまったのではないかとさえ思える程強烈な衝撃に、今度はミストルティアが痛々しさを感じさせるほどに瞳を見開くこととなった。視界が真っ白に染まる。同時にミストルティアの身体は吹っ飛び、幾度となく地面をバウンドした。

「あつが……おごおおっ……おっえ……うおえっ……うげえええええっ」

下腹を殴られたことで強烈な吐き気までわき上がってくる。

地面に蹲った状態で、胃液を吐いた。

(痛い……苦しい……。死んでしまう)

吐瀉物を撒き散らしながら、凄まじい痛み悶える。ほとんど動くことができない。

「不様な姿だなあミストルティア」

そんなミストルティアの至近にまで怪人が接近して来た。

声に反応して顔を上げると、化け物の豚を思わせる醜い顔が視界に映り込む。

「あ……ひっ……ひっ」

あまりの不気味な有様に、気がつけばミストルティアは不様な悲鳴を漏らしていた。

「なげない悲鳴だなあ」

怪人が笑う。

確かにそのとおりだ。

けれど、どうしようもない。

「あ……い、嫌だ。いやあああ……」

苦しみつつ、ミストルティアはこの場から逃げようとする。

つい数時間前までただの学生でしかなかったのに、それが今、化け物と戦っている。それどころか勝るとさえ思ってしまった。

しかし、その自信は全身を包み込む痛みの前に一瞬で消え去ってしまった。力を手に入れたことによる高揚感がなくなり、現実引き戻されたと言うべきか……。

(怖い。怖い……怖い怖い怖い……)

代わりに抑え難い程の恐怖が膨れ上がってくる。

「ひいっ！ ひいひいひい……」

不様すぎる悲鳴を上げつつ、怪人から逃げようとする。だが、痛みのせいで立ち上がるなどできない。結果、地面を這いずって逃げるといふ情けない姿を晒すことになってしまった。

「じづになぎげない姿だ。だが、恐怖し、怯える女は実にそぞる。プヒヒ……お前の身体、たつぷり味わわぜでもらうぞ。ぞじで……セイクリッドジュエルの力をいただく。我らがクイーンのために！」

そう言うと同時にガイルオークは容赦なくミストルティアの両足首を掴んできた。そのままセレストギアに包まれた身体を巨体で宙吊りにしてくる。

「は、放してっ！ 放してえええっ！」

身体の自由が奪われる。それがまた恐ろしさを増幅させた。

慌ててミストルティアはもがく。だが、力を使い果たしてしまった状態ではまともな抵抗などできるはずがなかった。

「ミストルティア……お前の力はづよい。じづに強大なものだ。まともに戦えばオデだつて勝つことはできなかったらう。流石はクイーンのプロトタイプ……。だが、お前はミスをした。クローン兵相手にぢからを使いすぎたんだ。ぞの上、お前はオデの腹に攻撃を

加えてきた。オデの腹はご覧のとおり脂肪がたつぷり詰まっている」

言葉通りガイルオークの下腹部はブクブクに膨れ上がっている。

「この肉が衝撃を吸収する。打撃殺しの身体とでもいうべきがなあ？ 腹ではなく頭を殴るべきだっだなあ。そのミスが……今の事態を招いた。その現実をたつぷりこの身体に教えてやる」

ガイルオークは実に楽しげに呟くと共に、足首を掴んだ脚を左右に開いてきた。セレストギアの黒いショーツに隠された股部分を思いつきり怪人の前に晒す格好になってしまう。「あっ！ いやっ！ はな——放してっ！ こんな格好……いやああああっ！」

「ブヒヒヒ」

放して——必死に訴える。

けれど怪人は聞き入れてなどくれはしなかった。

それどころか悲鳴を上げれば上げるほどより表情を嬉しそうに歪めてくる。剥き出しになった股間部へと顔を近づけてきたかと思うと、ヒクヒクと鼻を蠢かして匂いを嗅ぎ始めた。

「スンッ……スンスンッ……ブヒヒヒ……実にいい匂いがするぞ。さつきまで戦っていたからな、こんなところまで汗塗れだ。お陰で実に濃厚な牝の匂いがプンプンしてる」  
「なっ！ へ……変なこと言わないで！」

秘部の匂いを嗅がれた上、濃厚などとさえ言われてしまう。耐え難い程恥ずかしい。



「変なこと？　だが、事実だぞ。お前のここは凄くにおっでいる。しかもこの少し酸っぱい匂い……これは……処女の匂いだなあ」

「——なっ！」

処女——その言葉にさらに羞恥が膨れ上がっていくのを感じた。

「ば……馬鹿げたことを口にしないで！　そんなこと……に、匂いで分かるわけが……」

「それが分かるんだなあ。オデは今まで何人もの処女を犯してきた。その経験で牝の匂いでいたいそいつの経験がわかるようになってるんだよ。とはいえ、それでも確実ではない。だからな……」

そこで一旦「ガイルオークは言葉を切ると、改めて囁くように——

「味の方も確かめぎぜでもらう」

と伝えてきた。

「あ……味？　ま、まさか……」

言葉の意味——すぐに察しがついてしまう。

「や……やめて！　それは！　それだけはっ！」

言葉と共に身を振る。だが、やはり無駄な抵抗にしかならない。

怪人はそんなミストルティアを小馬鹿にするような視線で見つめつつ、黒いシヨーツに不気味な程に長い舌を伸ばしてきた。

ぐっちゅ……ちゅれるおおおっ……。

「ひっ！ くひいいいっ！」

ショーツ越しではあるけれど、怪人の舌が秘部に密着する。股間のワレメをなぞるようにミストルティアの女性自身を舌先でなぞってきた。

途端にこれまで以上のおぞましさが膨れ上がる。ただでさえ鳥肌が立ったままの肌が、さらに粟立っていった。

「いやっ！ こんないやああああっ！」  
気持ち悪い。

怪物の舌が触れている——そう考えるだけで自分の身体が腐っていくような気分になされた。凄まじい嫌悪感。悲鳴を抑えることなどできない。

だが、悲鳴を上げたところで意味などなかった。怪人はミストルティアに対して一片の慈悲も向けてはくれない。

「実にいい声だぞ。もつとだ。もつとその声を聞かせろ！ ブヒヒヒヒ」  
それどころかさらに舌を激しくくねらせてくる。

ぐつちゅ……ちゅれつろ……れろつれろつれろつ……ぐつちゅ……ちゅずるるう……。  
ショーツが唾液でグチャグチャになるほど激しく舌を蠢かし、時には口唇を秘部に押しつけてきたかと思うとじゅるじゅると吸るなどという行為まで行ってきた。

「ふっぐ！ んぐうう！ 吸われている。私の……ああ……大切なところが怪人……化け物なんか吸われてしまってる！ こんなイヤあああっ！ やめて！ これ以上はゆ……

「許さない！ 許さないんだから！ だから！ 放して！ 私に変なことをするなあ！」  
「許さない？ ブヒヒ……だがなんだ？ 今のお前になにができる？ ほら、でいごう  
できるものならじでみる。ほら、抵抗しないと……こんなことまでじでじまうぞお」

ただ嘲笑ってくるだけでは終わらない。

より淫らに舌を蠢かしてきたかと思うと、ショーツを舌だけで横にずらしてきた。当然  
これまで隠されていた秘部が剥き出しになってしまう。唾液でベトベトになったミストル  
ティアの女性自身が……。

「ブヒヒ……おまんこ御開帳だあ」

「あ……そんな……み、見ないでっ！ 見ないでえええっ！」

今まで誰にも見せたことがない女として最も大切な部分が怪人の前に晒されている。心  
がズタズタになってしまいそうな程辛い事態だった。

「ピンク色の褄が見える。じづに綺麗なまんこだ。間違はなく処女だな」

普段は閉じている秘裂。しかし、ショーツ越したたとはいえ散々舌で翳なぶられてしまっ  
たせい、僅かではあるけれど左右にぱっくり開いてしまっている。そのせいでガイルオ  
ークの言葉通り肉褄が覗き見えてしまっていた。唾液に塗れたピンク色の肉花弁——呼吸  
に合わせて蠢いている様が実に淫らである。

これを見た怪人は興奮を覚えたのか、実に楽しそうに笑いつつ肉棒を不気味な程に膨れ  
上がらせてきた。勃起に合わせてガイルオークの股間部を守るように装着されていたガー

ドが外れる。

「なっ……こんな……嘘……ひっ……ひいひいっ！」

宙吊り状態のミストルティアの眼前に、ちよつとした人間の腕くらいはありそうな巨棒が映り込んだ。

肉茎に浮かび上がる幾本もの血管。不気味な程に膨れ上がったカリ首——凶器のようにさえ見える。そんなものが呼吸に合わせてヒクヒクと蠢いている。その有様は信じ難いほどに醜悪なものだった。

しかも、ただ醜いだけではない。強烈な臭気まで漂わせてくる。嗅いでいるだけでまたしても吐瀉してしまいそうになる匂いだった。

「臭い……気持ち悪い……」

慌てて視線を逸らそうとする。

「ブヒヒヒ」

しかし、怪人はそれを許してはくれない。

こちらの嫌悪を理解しているらしく、もつと見ろといわんばかりに腰を突き出し、ミストルティアの頬にグチュツと肉棒を密着させてきた。

生臭く、生温かい感触が伝わってくる。

「うっぐ……ふぐううっ……」

（腐る。こんなの……私の身体が腐ってしまう……）

より膨れ上がるおぞましき。涙さえ零れ落ちてしまこぼいそうだった。

あまりに辛すぎる状況——しかし、怪人は慈悲の心など向けてはくれない。それどころかさらに嬲るように腰をクイッククイッと振ることでミストルティアの頬を肉棒で擦り上げつつ、剥き出しにした肉花弁に直接舌を這わせてきた。

ぐっじゅろ……れちゅろおおっ……。

「くひっ！ あっふ……くひいひいっ！」

生温かい舌が敏感部を刺激してくる。

剥き出しになつた肉花弁をなぞるように舌を動かされた途端、一瞬身体が甘く痺れてしまふような、電流にも似た刺激が全身を駆け抜けていった。

ビクビクッと肢体も条件反射のように震えてしまう。

「ブヒヒ……可愛らしい声が聞こえたぞお。もじがじで、きもちよがつたのかあ？」

「なっ！ ふ……ふざけないで！ こんなこと……気持ちいいわけない。ただ……き、気持ち悪いだけよ！」

ニタニタ笑いながらの問いかけ——肯定などできるはずがない。当然のようにミストルティアはガイルオークの言葉を否定する。

「うぞについても無駄なんだなあ。ほら、これがいんだろ？ ごうざれるのが気持ちいいんだろ？」

けれど信じてなぞくれない。

怪人はさらに秘部に対する愛撫を激しいものに変えてくる。

ぐっちゅ……ぬっちゅろ……れろっちゅ……れろっれろっ……んれろおおお……。

舌がくねる。秘裂をただ舐め回してやるだけではない。肉襞の一枚一枚をなぞるように刺激しつつ、時には腔口に舌先をズプッと挿入するなどという行為まで行ってきた。

「んふうううっ！ くっふ！ はふうううっ！」

（挿入ってきた。嘘……舌が……私の腔中に……こんな……嘘でしょ？ 動いてるのが分かる。私の腔中をかき混ぜてくる）

グッチュグッチュと淫猥な音色を奏でつつ、腔壁を舐め回してくる。ぴっちり閉じた腔口を解すように、ジュボジュボと抜き差しまで……。それどころか、時には口唇を押しつけ、じゅるじゅると肉花弁を吸ったりもしてきた。

「はっぐ……あっ……あっふ……んふうううっ……」

激しくなっていく愛撫——それに比例するように、身体中を駆け巡る甘い刺激は大きくなっていく。舌の動きに合わせて下半身が燃え上がりそうな程に熱を持ち、ジンジンと疼き始めた。

（なにこれ……こんな……無理矢理されるなんて最低なのに……。絶対にあっちゃいけないことなのに……。どうして？ なんだなの？ これ……んんっ……なんか……き、気持ちいい？）

感じてしまう感覚——それは明らかに愉悦だった。舌の動きに合わせて身体中から力が



抜けそうになる。思考にノイズが混じる。思わず「あっあっ」という甘い嬌声きようせいを漏らしてしまっそうになつてしまふ。

（嘘……嘘よ。あり得ない。無理矢理されて気持ちよくなる？ そんなことあるはずがない！ 気持ちよくない！ こんな違うっ!!）

しかし、残つた理性でミストルティアは性感を否定する。

「んんんっ！ くふううう！ ふうっふうっ……んふうううっ」

必死に口唇を閉じることで、嬌声を抑え込む。

「我慢は身体に悪いぞ。ほら、ぎもぢいいならぎもぢいと正直に言うんだ」

ガイルオークはそんなミストルティアを嘲笑うみたいさらにさらに舌をくねらせてくる。膣はじを穿り回すように舌をグルグルと回転させてきた。

「か……んじてない！ 違う！ わた……しは……んっふ……はふううっ……き、気持ちよくなかなかって……はあっはあっはあ……な……ないっ!!」

激しさを増す愛撫——それに比例するように性感も大きくなる。舌で膣壁を舐め上げられると、それだけで思考が歪むほどの肉悦を覚えてしまふ自分がいた。

だが、流されるわけにはいかない。否定する。首を左右に振り、感じたりなどしてないと必死に訴える。

「頑固な奴だ。だが、言葉でいくら否定しても無駄だぞ。実際お前のがらだは喜んでる。オデが舌を動かせば動かすほど、あそこからはまん汁が溢れだじでぎでいるぞお」



その言葉通り、ミストルティアの秘部からは愛液が溢れ出し始めてしまっていた。

「う……嘘よっ！ そんなことない！ 違う！ ふ……ふざけた……んっは……はぐううっ……ふうっふうっふうっ……こ……ことを……いわないでっ！」

けれど認めない。受け入れない。拒絶する。

濡れている？ そんな馬鹿なことあるはずがない。怪人が嘘をついているだけだ——と、自分自身に言い聞かせるように、そんなことはあり得ないと必死に訴えた。

「こんなことで感じることもなんか……ない！ 全部……む……意味……だから……もう……やめて！ 私を……は……放してっ！」

「……ブヒヒ、うぞばがりつく女だ。まったく……真実を語らない口など意味がないな。だから……これでふざいでやる」

「塞ぐ？ 何を……まさか……」

何をしようとしているのかを察する。

そしてそれは——正解だった。

じゅっぽおおっ！

「おっぽ！ むぼっ！ おびよおおおっ！」

頬を擦っていた肉棒を無理矢理口腔に挿し込んでくる。口唇を割った肉槍が、容赦なく口内を蹂躪してきた。

「あぶばっ！ ぶっびゅ！ おびゅうっ！」

(お……大きい。おおき……すぎる。硬くて……熱くて……臭いのが……怪人のお……おちんちんが……口の中にズブズブって……。こんな……裂ける。私の口が壊れるう)

顎が外れてしまうのではないかと思う程に口が拡張される。同時に口内にムワツと生臭い匂いが広がり、さらに吐き気がわき上がってきた。

「し……しむっ……おおきしゆぎで……わだちのくちが……こわれりゅ……。ぬ……おつご……ぬいで……こりえ……ぬいでえええ」

肉棒が大きすぎるせいで呼吸さえも阻害されてしまう。肉槍で突き殺されてしまうのではないかと本気で思ってしまうような状況だった。だから必死に抜いてくれと訴えるのだが、やはりどんな訴えも意味などなかった。

「はああああ……ざいごうだあ。お前の口まんこ……さいごうに気持ちいい！ おおお！ いいっ！ いいぞおおっ！」

ガイルオークは歓喜する。

それと同時にただ口腔に肉槍を突き込むだけでは意味がないとばかりに、容赦なくピストン運動まで開始してきた。

じゅっぼ！ どじゅっぼ！ ずじゅぼっ！ どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ！

「あぶぽおおっ！ ぶっぼ！ あびゅっば！ ぼっふ！ おぼっぶ！ ぼっぼっぼっぼっ！ んぽおおおおっ！」

## 四章 ミューゼリオン

「なんで……楓が……？」

ずっと探してきた妹が目の前にいる。

以前と変わらない笑顔を浮かべる楓。ずっと見たかった表情だ。

しかし、ミストルティアは喜びではなく戸惑いを覚える。上半身を起こした状態で、果然と妹を見つめた。

そうなってしまった理由は簡単だ。

怪人、性を丸出しにした男子達がおり、ミストルティアはグチャグチャになっているという状況。異常としか言い様がない。ミストルティアが知っている妹はこんな状況で笑える人間ではなかった。なのに以前と変わらない笑みを自分へと向けている。

何故このような表情を浮かべるのか？ 浮かべることができるのか？ 考えるとんだか恐ろしささえ感じてしまう。

目の前にいる楓は楓だ。しかし、妹ではない別の存在のようにも思えた。

だからこそ「なんで？」という以上の言葉を口にすることができない。ただ呆然と楓を見つめ続けることしか、今のミストルティアにできることはなかった。

「なんでそんな顔をしてるの？ 久しぶりに会えたのに……どうして？」

ニコニコ笑顔を浮かべたまま、首を傾げてくる。

「何でって……それは……」

「もしかして、楓が楓じゃないように見えてるの？」

ミストルティアの心を読んだかのような言葉を向けてきた。

「それは……」

口籠もってしまう。

そんなミストルティアに対し、楓は「その予感……当たりだよ♪」などという言葉をあつさり口にしてきた。

「当たり？ ど……どうということ？ 何をいつてるの楓？」

「……んふふ、簡単なことだよ。お姉ちゃんが思ったとおり、楓はね……楓じゃなくなっているの」

「楓が楓じゃない？」

呆然と呟く。

すると楓は優しくミストルティアの頬を掌で包み込んできた。

「そう、楓はもう前の楓じゃない。プロフェッサーネオに改造されたの。セイクリッドジュエルを胸に埋め込まれた。この世界を支配する女王になる為に……ね♪」

「女王……クイーン……」

これまで怪人達が口にした言葉が蘇ってくる。

あの言葉が楓を指していることは分かっていた。それでも、実際楓自身から聞かされると血の気が引く。

「しかも、改造されたのは身体だけじゃない」

楓はこちらの動揺を多分理解している。それでも話を続けてきた。

「頭もおかしくされちゃった。マインドコントロールって言えばいいのかな。プロフェッサーが考えてること、つまり、この世界の支配者になることを楓はね……受け入れちゃってるの。だからね、こうしてお姉ちゃんに会いに来たってわけ」

「……世界の支配者になる為に私に会いに来た？ どういうことなの？ 楓……貴女が何をいつてるのか理解できない」

それとこの状況にどんな繋がりがあるというのか？

「簡単なことだよ。楓の身体はね、確かにセイクリッドジュエルに馴染んでいる。お姉ちゃんよりもずつとずつと……。でもね、お姉ちゃんみたいにまだ変身できないの。何故だか分かる？」

「何故って……そんなこと……」

分かるはずがない。

「簡単なことだよお姉ちゃん♪」

そう言う楓はニコニコとした微笑みを絶やさぬまま、晶へと顔を寄せてきたかと思うと、躊躇うことなく口付けしてきた。

「んんんっ!!」

自分の唇と妹の唇が重なり合う。

まったく想像もしていなかった事態——思わずミストルティアは瞳を見開き、身体を硬直させる。

楓はそんなこちらを瞳を細めて見つめながら、さらに強く唇を押しつけてきた。いや、ただ口唇と口唇を重ねてくるだけでは終わらない。

「むっふ!! んんんんっ!!」

(これ……挿入ってくる!! 舌……楓の舌が私の口の中につ!!)

そうすることが当然だとしても言うように、ミストルティアの口内に舌を挿し込んでくるなどという行為まで行ってきた。

ぐっちゅ……むっちゅる……。ぐちゅるっ……。ちゅっぶ……。にゅちゅるう……。

「もふううっ! んっじゅ……むじゅうっ! むっむっむっ……んふううっ! ちゅっぶ

……はぶっ……んじゅぶううっ……んっんっ……んふうううっ」

舌を蠢かせ、口腔をかき混ぜてくる。

「んふふ……らしいしゅき……おねえひゃん……ちゅっろ……んちゅれろっ……くっちゅ……れろっれろっ……んじゅるるるう……」

潤んだ瞳に、紅潮した頬——妹ではなく、女としての楓の表情だった。

淫らささえ感じさせる顔で、口腔粘膜を舐め回してくる。歯の一本一本を舌先でなぞり



ながら、じゆるじゆるという下品な音色が繋がりが合った唇と唇の間から響いてしまうことも厭わず、激しく口腔を吸ってきたりもした。

いや、吸るだけじゃない。時には楓の方から唾液を流し込んだりもしてくる。

(駄目……こんなの……駄目よおっ……)

あまりに淫らすぎる。妹相手にしていることではない——と、頭の中では思うのだけれど、散々辱められ、肉悦を刻みに刻まれた肉体は、口腔を蹂躪されるだけですぐに反応を示してしまう。

舌の動きに合わせて熱くなっていく身体。全身から力が抜けていく。それどころかジンジンと秘部が疼くような感覚まで……。

(いけないのに……やめさせないと駄目なのに……)

「むっふ……んっじゅぶ……もじゅうっ……んっんっ……むふうううっ……」

気がつけば楓に合わせて自分から舌を蠢かせるなどと言う行為まで行ってしまう。そんなこちらの反応に嬉しそうな表情を浮かべつつ、楓はさらに舌の動きを激しいものに変えてきた。

ぐっちゅ……ぬちゆるっ……。ずっちゅ……くちゅくちゅ……むちゆるるるう……。

響き続ける淫靡な音色——永遠に続くのではないかと思う程だった。

「んっちゅ……はふうううっ……はあっはあっはあっ……可愛いよお姉ちゃん♥」

だが、やがて楓は唇を離してくる。



ツプツと唇と唇の間に唾液の糸が伸びた。

その糸を見つめてしまう。楓の唇へとジツと視線を向け続けてしまう。

「もしかして……もつとキスしていたかった？」

小悪魔みたいな表情で首を傾げてくる。

「そ……そんなこと……あるわけない！ それより……どうしてこんなこと!？」

凶星を指された気がした。

慌てて誤魔化すように問う。

「どうして……ふふふ、そんなの決まってるよ。お姉ちゃんの力を楓のものにする為だよ」

「私の力？」

「そう……確かに楓はクイーンになることを受け入れてる。この世界の女王になるつもり満々。そんな風に心を変えられちゃったからね。だけどね、一人で女王なんてイヤだっと思ってる心もあるの。一人じゃイヤ。お姉ちゃんと一緒につて……そう思ってる自分がね。その心が、楓の変身を妨げてみたいなの。だから……んふふ、お姉ちゃんの力を私のものにすることにしたの」

「どういう意味？」

「女王はね……崇高にして絶対な存在。この世に一人しか存在してはいけないもの。だから、お姉ちゃんもクイーンにすることはできない。でもね、お姉ちゃんの力だけなら一緒

にクイーンになれる」

つまり、ミストルティアの力を自分のものにするので、常にミストルティア——晶と一緒にいるという状況を作り出すのだと楓は語った。そうすればきつと自分はクイーンになれるのだ——と。

「だから、楓はここに来た。お姉ちゃんの力をもらう為に……。その為の準備も終わった」

「準備？ どういうこと？」

「こういうことだよ」

楓はパチンツと指を鳴らす。

「え？ あ……なに!? これ……ど、どうということなのっ!!」

刹那、ミストルティアの肉体に変化が起きた。

「あああ……熱い！ これ……んくううっ！ あそこ！ 私をあそこが……熱い！ 熱くて……うつく……はあああああつ！ なに……あああ……どうして？ これ……なんで？ 私の身体に……なんでこんなものが!」

燃え上がりそうに火照った秘部から肉棒が伸びる。

不気味な程に膨れ上がった亀頭に、大きく開いた傘。肉茎には幾本もの血管が浮かび上がる。ペニス、男性器、おちんちん——女の身体には本来決してあるはずのないものが、生えてしまっていた。

しかも、大きさはガイルオークのものほどではないけれど、遥かに自分を犯してきた男

子生徒達のものよりも大きい。

「どういうことなの？　こんなの……嘘っ……」

醜い肉棒がビクビクと震えている。自分の身体から生えているものとは思えない程醜悪だ。ツンツとした匂いもきつい。嗅いでいるだけで噎せてしまいそうな程に牡臭かった。

そんなものが自分の身体についている。現実とは思いたくなかった。

「嘘じゃないよ。これが現実だよお姉ちゃん♪」

しかし、これが否定することのできない事実であることを妹が伝えてくる。しかも、言葉だけでは無い。

「ほら、夢じゃないでしょ♪」

などと口にしつつこちらの下半身へと手を伸ばしてきたかと思うと、躊躇うことなくギョッと肉棒を掴んできた。

「あふうっ！」

ただ、触れられただけでしかない。

しかし、肉棒が柔らかく温かな楓の手に包まれた瞬間、それだけで一瞬下半身の感覚がなくなりそうな程の刺激が走った。握られたのは肉棒だけでしかない。だというのに、まるで全身を抱き締められたかのような感覚さえ覚える。そんな強い刺激に、ミストルティアは思わずビクンツと肢体を震わせた。

「な……なに!?　これ……」

生まれて初めて感じる男の刺激に戸惑いを覚えざるを得ない。

「んふふ……。ほら、嘘じゃない。これはお姉ちゃんの身体の一部なんだよ。気持ちいいでしょ？　こんな風にされると感じちゃうでしょ？」

そのような反応を示すミストルティアを、妹は熱い視線でジッと見つめつつ、さらに肉棒を握る手に力を込めてきた。しかも、ただ握ってくるだけでは終わらず、シコシコと扱くなどという行為まで……。

「あつふ……。んふああああつ！　だ……。駄目っ！　んんんっ！　か……。楓、こんな……。いけないからっ！」

根元から肉先までを掌で擦られる。するとそれだけで反射的に熱い吐息を漏らしてしまう自分がいた。ほんの少し刺激されただけだというのに、明らかに性感としか言えないような感覚を覚えてしまう。

妹に肉棒を弄られて感じる——決してあつてはならない事態だった。だから必死にやめてくれと訴える。

「いけない？　嘘をついちや駄目だよお姉ちゃん。本当は気持ちいいんでしょ？　こうやって楓におちんちんゴシゴシされて……。最高に感じてるんでしょ？」

しかし、ミストルティアの願いなど聞き入れてはくれない。それどころかさらに激しく肉棒を扱いてくる。

「んくううっ……。違う。感じてなんか……。気持ちよくなんかなってない！　あつふ……。ふ

うっふうっふうっ……私は嘘なんかついてない！ ついてな……い……はあ……はあ……から……だから……お願い。もう……やめて……」

「でも楓の目には感じてるようにしか見えないよ。んふふ、みんなもそう思うでしょ？」  
周囲を取り囲む生徒達に同意を求める。

「確かに……どう見ても感じてるよな」

「まあ感じないはずがないって。お漏らししてイッチャウのような変態だしねえ」  
するとクラスメート達はあっさりと楓の言葉に同意した。

「ち、違うのっ！ そんなこと……ふっぐ……くふううっ……ないっ！ ほ……んとに……私……感じてなんか……な……い……い……」

「違うよ。お姉ちゃんは感じてる。口で何をいっても無駄無駄。ほら、その証拠に汁が出てきたよ。お姉ちゃんのおちんちんの先っぽから汁が……」

その言葉通り数度擦られただけでしかないというのに、肉先からは半透明の汁が溢れ出していた。糸を引く程濃厚な汁が……。

そんなものが楓の掌に絡み付く。

グッチュグッチュグッチュグッチュグッチュ……。

当然のように手淫に合わせて淫靡な音色まで響いた。

「な……なにこれ？ なんでこんな……!？」

「女の人が気持ちよくなったら濡れちゃうのと一緒だよ。男もね、感じると濡れるの。だ

からね、このグチュグチュした汁はお姉ちゃんが感じてる証拠ってわけ」

楓は掌が濡れてしまうことも厭わない。

それどころか積極的に指で分泌液を絡め取ってくる。

溢れ出す肉汁を手を使ってペニス全体に広げてくる。

その汁を潤滑液として、これまで以上に激しく肉茎を擦り上げてきた。

「はふあっ！ くふんんっ！ あっふ……おっおっおっ……ふほんんっ」

扱く勢いが増す。するとそれに比例するように覚えてしまう性感も大きくなってきた。

肉茎をギュッと締めつけられながらカリ首を擦られ、肉先を撫で回されると、それだけ

で腰が抜けそうになる。下腹部が熱く疼き、肉根から肉先に向かって何かがわき上がってくるのを感じた。

「なに……これ？ なんか……あああ……出ちやいそう。これ……んんんっ……おしっ

こ？ 私……お漏らししそうになっちゃってる!!」

膨れ上がってきた感覚は尿意にも似ていた。

「だ……駄目！ 楓……ふうううっ……これ以上は本当に駄目！ 駄目なの！ これ……

漏れちゃう！ 私……お漏らししちゃう！ だから……止めて！ 出したくない！ もう

……恥ずかしいのはイヤ！ みんなの前でお漏らしなんてイヤなの！ だから……やめて

えええっ!!!」

先程の排泄行為を思い出してしまう。人として最低な姿を晒してしまったことを想起し







るせいで、床には精液溜まりさえできていた。

『実にいい姿ですよミストルティア。精気もかなり吸い出すことができました。ですが、これで終わりじゃない。まだまだです。もつともつと貴女を犯してあげますよ。ふふふふ』  
プロフェッサーの楽しげな声が聞こえる。

「おほおほ……おーおーおー……」

それに反応することもできず、肉悦に蕩けた吐息を漏らし続ける……。

\*

「嘘……こんな……こんなところで……やめて……お願いだから……。ここではやめてええ！　ここでだけは……お願いだから……」

ある時は街中に連れて行かれ、そこで襲われた。

大勢の人々が行き交う駅前にて、ウナギ型怪人（ウナギに手足が生えたような不気味な姿だ）に背後から抱きすくめられる。幼い子供を抱きかかえておしっこさせるような体勢だ。ショーツを剥ぎ取られた状態の為、思いつきり秘部を人々に見られてしまう。

「なんだ？　な……なんかの撮影か？」

「特撮系AVとか？　にしても大胆だな」

「最低……」

人々が思い思いの言葉を向けてくる。興奮したような視線を、蔑むような視線を、容赦なく向けてくる。

あまりに恥ずかしすぎる状態だった。

耐えられない。必死に許してと怪人に懇願する。

「ウナウナウナ……許してなんて言葉は聞こえないぞお。それより、懇願しろ。私に種付けして下さいとオレに」

「なっ！ そんな……そんなこといえるわけ!!」

「そうか？ これでもかあっ」

ニタツとウナギ怪人が笑う。

バヂイイイイイイッ！

「はっぎ！ あがっ！ あぎやああああああつ!!」

途端に怪人が放電を始めた。

凄まじい電流をミストルティアの肉体に流し込んでくる。

「ああああ！ や……やべで！ ごれ……やべでええええつ!!」

強烈な痛みが走った。電流のあまりの強さに壊れた玩具みたいに肢体を震わせる。

「じぬっ！ わだぢ……ごんなの……じんじやうううっ!!」

決して言葉だけじゃない。本気で死を覚悟するほどの辛さだった。

「そうかそうか……死にたくないか。ならば……欲しいな？ オレの種が……」

電流を流し続けつつ、囁くように問いかけてくる。

「そ……それは……それはああああ……」

この辛さから逃れるには怪人の言うとおりにするしかない。

けれど、即答することはできなかった。人々の視線があるから……。

バヂバヂバヂイイッ！

「はぎゃああああああつ！」

しかし、迷うミストルティアを責め立てるように、さらに電流は激しさを増す。

「ほおおっ！　これ……ほとんど……無理！　た……えられない！　だじゅげでえええ！」

「ならばいえ、さあ……早く」

「いう！　いいまず！　いいまじゅうっ！」

耐えられるはずなどなかった。

「下さい！　あな……だの……あぎゃああ！　こ……子種！　わだひに……たね……ぐう

うう！　た……ねづげ……しでぐだざいいいいっ！！　お願いです！　おねがいにまじゅが

らあああつ！！」

悲鳴を上げつつ懇願する。ここが人前であることを理解しつつも、必死に怪人に対して

陵辱を自分から願った。

「ウナウナウナ……よく言えたなあ。いいぞ。その願い、聞き届けてやる」

勝ち誇ったように怪人は笑いつつ、電流を止めてくる。

「はっひ……あひいいいいっ……」

放電による身体の強張りが消えた。

刹那――

じよっぼ……じよぼろろろおおお……。

「あああ……うぞ……うぞおおおっ……」

電流によって身体が痺れてしまったことにより開いてしまった膀胱から、黄金水が溢れ出した。

「お漏らし……マジで？」

「あんな可愛いのにえぐいAV出てるんだなあ」

明らかに異常な状況だというのに、怪人が放つ瘴気が影響しているのか、人々は何処か呑気に呟きながら、ミストルティアの失禁を見つめてきた。

「いや……見ないで……いやああああっ！」

人前での放尿。十数人の人々に見られる――あまりに恥ずかしすぎる状況だった。とてもではないが耐えられない。

けれど、失禁を止めることができない。

「恥ずかしいのに……止まらない。おしっこ……やだ！ やだああああっ！」

子供みたいに泣きじゃくりながら、ミストルティアは小便を撒き散らし続けた。

「ウナナナナ！ 最高の姿だぞ。もう……我慢できん!!」

失禁を続けるミストルティアの姿に怪人が歓喜する。同時に恐ろしいほどに大きく勃起した肉棒を、躊躇うことなく人々の前で蜜壺に挿し込んで来た。

どじゅっぼ！ ずじゅぼおおっ！

「はひいいい！ 挿入る！ 太いのが……あああ……来るううう！」

これまで何度も刻まれてきた肉槍の感触——それが再び肢体を襲ってくる。しかも、ただ膣道を蹂躪してくるだけでは終わらない。

「嘘……奥まで届いてるのに止まらない！ これって……まさか……あああ……私の……し、子宮まで！ おおっ！ 来る！ 挿入って……あっあっ……はふあああっ！！」

当然のように子宮内部にまで肉棒を挿し込んで来た。

「ウナアアアッ！」

そんな深すぎる挿入と同時に怪人は奇声を上げる。

ぼっこ！ ぼごおおっ！

「な……これ……おおっ！ なに!? で……出てる!! 子宮……おおっ！ 子宮になんか……こ……れ……出されてるううう！ おっおっ——ふほおおおっ!!」

同時に肉先から子宮内に何かが流し込まれた。

それは白濁液ではない。球体の生温かいものだ。大きさは卓球の球くらいはあるだろうか？ そのようなものが何個も、何十個も流し込まれる。

「ふひいいい！ お腹！ 私のお腹がっ！ なに……これ……なんなのおおっ!!」

当然のように内側からポコポコッと腹が膨れ上がった。

「なにつて……もちろんオレの卵だ」

「卵って！ そんな……無理！ 破れる！ これ以上……挿入らないいいっ！」

子宮がパンパンにされてしまう。

「無理？ この程度で音を上げるなよ。本番はここからだ」

「ほん……ばん……？ こ……これ……い……じょう……な、何をっ?」

「もちろん、卵を受精させるんだよ」

そう言つてニタツと笑うと共に、怪人はピストンを開始してきた。

ずじゅぽっ！ どじゅうっ！ どじゅっぽどじゅっぽどじゅっぽどじゅっぽおっ！

「おおお！ 動き出した！ 突いてくる！ かき混ぜてくるうう！ パンパンになった私

の子宮を……硬いのが……大きいのが……ぐ……グチャグチャにしで……ぐりゅうっ！

おんっおんっおんんんっ!!」

自身の卵でいっぱいになった子宮を巨棒で蹂躪してくる。ズンズンッとピストンを加えられるたび、産み付けられた卵が子宮内で滅茶苦茶に蠢いた。それにより子宮壁が内側から圧迫される。

「おおお！ 潰れる！ 身体……内臓……めぢやぐぢやになりゅう！ 無理！ 止めて……

……これい……じょうは……ほ……んどこに……わだぢ……死ぬっ！ しにゅううう!!」

死ぬ——決して冗談ではない。心の底から本気でそう思った。

しかし、止まらない。止まってなぐれはしない。

「最高だぞ！ お前の膣中……堪らん！ 出る！ 出そうだ……少し腰を振っただけでも

う射精してしまいそうなくらいだぞお」

熱に浮かされたような様子で怪人は限界を訴えてくる。射精しそう——その言葉を証明するように、挿入時よりも一回りも二回りも肉棒は大きく、硬く、膨張していた。

「む……り……。いま出されたら……ホントに……お腹……破れる！ 無理！ 無理無理 無理いいっ!!」

卵だけで子宮はパンパンになってしまっている。僅かの余裕さえも残ってはいない。

「そう言われても……抑えられん！ いくぞおっ！」

肉棒の熱気が増す。より亀頭が膨れ上がる。

そして——

どびゅばあああつ！ ぶっびよ！ どびゆるるるうっ！

「はほおおおっ！ 来たっ！ 出てる！ これ……でりゅう！ あぢゅいの……わだひの腔中にくりゅううっ！ あっあっ……はひっ……ふひああああ♥」

精液が流し込まれた。

卵でパンパンになった肉壺に、濃厚すぎる牡汁が流れ込んでくる。熱汁が染み込んでくる。さらに子宮を膨れ上がらせてくる。

「はああああ……苦しい！ お腹……ホントに駄目……ふほおおおっ！」

当然のように圧迫感が増す。苦しみが増幅する。本気で死んでしまうのではないかと思つてしまうほどに……。

けれど、感じるものは辛さだけではなかった。

「はあああ……これ？ どういうこと？ なんで……おっおっおっ！ く……るしい！ お腹パンパンで辛い……し……んじやいそうなのに……おっおっ！ どうじで？ それ……ふひい！ それがいいっ！ いいのっ！ よすぎるのおっ！ これ……よすぎて……私……わたひいっ！」

苦しみが、辛さが、性感に変わる。死の予感さえしてしまう状況なのに、心地よさが広がってくる。

「やだ……こんな……こんなことで……いやあああああっ！」

感じたくなかった。愉悦など覚えたくはなかった。

しかし、拒絶に意味などない。

「あああ……来る！ 来るっ！ 来ちゃううっ!!」

どうしようもないほどに性感が膨れ上がる。

そして――

「いっぐ！ いぎゅっ！ わだひ……いぎゅうううっ♥♥♥」

達した。達してしまった。人々の前でミストルティアは絶頂顔を晒してしまった……。

「あっあっ……はあああああ……♥」

ビクビクと性感に肢体を震わせる。

「うわっ……すげえ顔……。イヤラシすぎだろ」



「いくらなんでもイキすぎ。流石に引くわあ」

みんなの蔑みの視線が向けられる。

「はへあ……ふひいいいっ……」

けれどどうしようもない。なにもできぬまま、ただただ肉悦に溺れ続けた。

しかも、辱めはこれだけでは終わらなかった。

「最高だったぞ」

と満足した怪人が肉棒を引き抜いた瞬間、それが始まる。

「あ……なに？ こ、これ……あっふ……くふうう……ふうっふうっ……う、動いてる!!  
し……子宮の中で……卵が動いて……まさか……これって……まさかあああっ!!」

子宮内に溜まった卵が蠢き始めた。膨れ上がった腹の上からでも、中のものが動いているのが分かる程の激しさで……。

「で、出ようとしてる？ 卵が？ そ……そんなのイヤッ！ イヤよっ！ ぜ……絶対に。いやあああっ!! んっふ！ くふううううっ！」

子宮口を押し開き、膣口へと向かってくるのが分かる。

卵を産む。化け物の卵を……。しかも大勢の人々の前で……。

絶対に受け入れられない事態だった。

「むふうう！ くっふ！ んっんっ……ふぐううううっ！」

抱き上げられた状態のまま必死に下半身に力を込め、出産を抑え込もうとする。

「無駄だぞ。さあ、産め！ 産むんだミストルティア！ ウナアアアッ!!」  
が、怪人は耐えることを許してはくれなかった。

バヂイイイイッ!

「はっぎゃっ! あぎゃああつ!」

再び電流が流される。

「ふぎいいいっ! で……でりゅ! おおおっ! これ……らめえええ! 産まれる!  
出る! 卵……でりゅううっ!」

抵抗力が根こそぎ奪われ――

どびゅぼっ! ぶっびゅ! どびゅばああああつ!

「ほっひ! ふひっ! おひいいいっ!!」

産卵が始まった。

大きく開いた膣口から、幾つも連なった卵がぼこぼこ顔をだし、地面に落ちていく。

「で……でりゅ! 卵……でちゃつでりゅ! わだち……さ……産卵しちゃつでりゅ  
う! おんっおんっ……おほおおおんっ!」

体内に溜まっていたものが外に出て行く。圧迫感が消え、代わりに凄まじい解放感に全身が包まれることとなった。

「はああああ……これ……しゅごい……き……もち……いいっ! おおお! いいのっ!  
よすぎる! イヤなのに……これ……いひいいいっ!! イク! わたひ……また……おお



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

mille-feuille

業界初!?

本格的に遊べる  
アクションHゲーム

!!

イベントCG&ドット風  
二種類のHシーンが楽しめる!



極煌戦姫

Maximum Princess

# ミスドールズ

ベルトスクロールアクション

原画：緑木色 シナリオ：上田なかの 原作：R.Y.O.

※16歳未満の方はご購入できません。

■価格：パッケージ版 / ダウンロード版 3,240円+税 OS：Windows XP 以降の日本語版 ■ベルトスクロールアクション&アドベンチャーゲーム ■女性フルボイス

パッケージ版  
ダウンロード版

大好評発売中!

公式サイトにて  
遊べる体験版配布中!

<http://www.mille-feuille.jp/>

制作：ミルフィーユ 販売：株式会社キルタイムコミュニケーション  
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル TEL：03-3555-3431 (販売) FAX：03-3551-1208

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】  
隔月発売  
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】  
隔月発売  
1-3-5-7-9-11月

【電子版】  
毎月配信  
書籍版は奇数月  
発売



二次元  
**ドリームマガジン**  
3D DREAM MAGAZINE

COMIC  
**UNREAL**  
ファンタジー

正義のヒロイン  
**姦獄ファイル**  
Sins of Heroes

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌  
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も  
好評発売中!

KTC 編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! **キルタイムコミュニケーション**

検索

二次元ドリームノベルズ

3D 美少女 3D  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

戦うヒロインを屈服させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

フリタム120%!?  
ジャンルにこだわらない  
ドキドキキララ!

女刑事美優  
美優は自らの身体で...

リアルドリーム文庫

あとみつく文庫

呪詛喰らい師  
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプの?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めないライトノベル!

「小説家になろう」の男性向けサイト  
「ノクターノンノベルズ」  
から書籍化!

異世界  
ドキドキキララ  
キララ系  
ドキドキキララ系  
ドキドキキララ系  
ドキドキキララ系

ドキドキキララ系  
ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!  
ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫